

最近想う事

山下寛二

今は 2025 年春、野や川にいのちの芽生えがいっぱいです。

毎年巡って来るものながら、その度にいのちの存在を改めて認識させられます。

私の生活圏にある多摩川の草木は冬枯れのくすんだ色が、黄色の新芽に一齐に芽吹き絨毯状になっています。

桜の名所では満開の桜が多くの人に幸福感を与え喜ばせています。

その中には赤、黄、緑、青など多くの色と形が含まれています。

それらの色と形を更に自分の所有として残したいという願望は誰しも自然に持つ感情ではないでしょうか。



「千代田のさくらまつり 2025」パンフレットより 千鳥ヶ淵ボート場



粕江 早春薄暮の多摩川 F15 油彩画



自宅近傍の多摩川

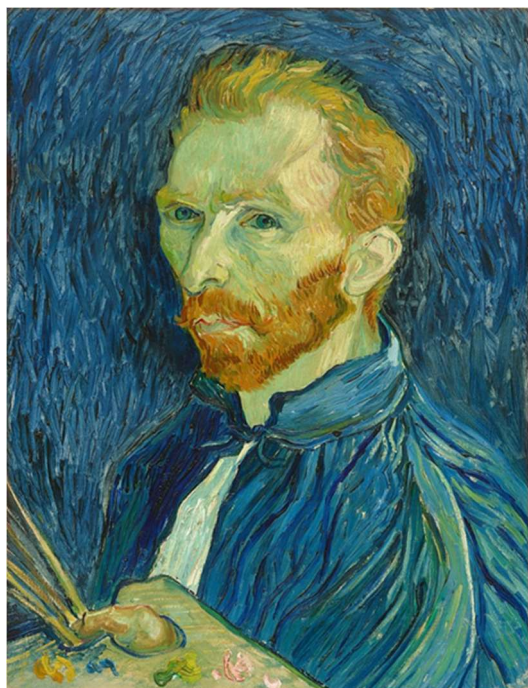
然し、人は自然ばかりでなく、4 万年前のラスコーの洞窟画に見られるように動くもの、人間や動物を最初に描き始めました。

動物の中でも特に多いのは我々人間に関するものではないでしょうか。

理由、人間は一番人間に関心が高く、人間が一番変化して興味深い。

故に絵や文字にして所有し表現したい願望を持つのではないのでしょうか。

人間の特徴は感情を持っていること。例えば、喜び/嬉しさ、希望、失望、悲しみ、寂しさ、孤独、優越/一番、怒り、劣等感、忍耐/忍従/忤度、勝ち/勝ちたい、負け/負けたくない、恥、満足/自己満足/自己憐憫、愛/愛したい/愛されたくない、妬み、嫌い、等々もっと人間は、限りない複雑な感情や感情の行動を持つことが出来ます。それを、絵画の達人たちは表してきました。



例えば、ゴッホの場合、なぜ彼がいまだに世界の人気を維持しているのでしょうか。

私は思います。

彼は本当に素直に自分の生き様を絵に追及した人だと思います。

然し彼の人生は決して多数の人が求める美しい人生ではなかったのです。

そこには、絵の追求心、純粋な情熱と現実と狂気さえもありました。

普通の人間である人が持つ感情を、ありったけ表現しようと試みた人だと思うのです。

自画像 キャンバスに油彩、57 × 43,5 cm、ナショナル・ギャラリー蔵 1889 年 8 月 (F626)

恐怖のカラスの絵がある一方、万人に最高ともいえる幸福感を与えるヒマワリを表すことが出来ました。



彼はあのヒマワリを、愛する人として描いたのではないのでしょうか？

私にはあれが彼の愛人だったのではないかとさえ思えます。

《種になった 4 つのひまわり (F452) 》1887 年 |
クレラー・ミュラー美術館 (オランダ、オッテルロー村)

私には絵が見る人を惹きつける要素の一つに、どんなに厳しく冷たく虚無的に感じられる場合でも、根底に必ず愛が存在すると思います。

人間は何故絵を描くかーそれは十人十色でありましょうがーその根底に愛を以て描かれた絵は人の心を何万年後になっても惹きつけるのだと思っています。

この意味で私は今最もいつも尊敬の念をもって見れる、慰めてくれるものはやはり世界のだれにも愛されている以下の“The Pieta” by Michelangelo であろうと思います。



「サン・ピエトロのピエタ」（1498 年 – 1500 年）は、イタリア・ルネサンス期の巨匠ミケランジェロによる彫刻。

ローマのサン・ピエトロ大聖堂収蔵の大理石彫刻の一つ。

おわり